

看護技術における行為の構造化（第4報） —ガウンチェンジにおける原則の観点から—

鹿内あずさ, 伊藤祐紀子, 明野 伸次, 平 典子, 花岡真佐子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

要 旨

本研究では、第2報看護技術における行為の構造化—ガウンチェンジにおける身体性、順序性の特徴—より示唆された仮説としての原則が、既存のテキストではどのように扱われているのかを明らかにし、原則の観点から行為の構造を考察すること目的とした。ガウンチェンジにおける原則とは、ケア関係・空間を作りながら、ガウンを着脱し、ケア関係・空間を解消させるプロセスと、ガウンチェンジのための身体空間作りとガウンの着脱の行為を行き来するプロセスとした。11冊のテキストより、ガウンチェンジの手順と看護師の行為を抽出し、表を作成して原則との比較検討をした。

その結果、2つの原則は検討したすべてのテキストに含まれており、テキストの記載内容では、原則が複雑に行き来することが明らかとなった。しかし、原則を捉えるには、手順をなぞるだけでは難しいことが考察された。ガウンチェンジにおける特有の順序性と身体性の特徴を、原則をもとに教授することによって学生の手順の理解を促進し、技術を修得していく必要性が示唆された。

キーワード

看護技術, 原則, 行為の構造化, ガウンチェンジ

はじめに

我々は、先の研究において、看護技術における行為の構造化を図ることを目的に第1報¹⁾、第2報²⁾を報告した。第2報では、ガウンチェンジにおける身体性と順序性の特徴を検討した。結果として、ケア関係／空間を作りからそれを解消するという行為のプロセス（図1）と、ガウンチェンジのための行為の身体性と順序性を形成するという特徴が見出された。ケア関係／空間を作りからそれを解消するというプロセスは、ガウンチェンジを含むどの看護技術にも共通する構造であり、空間作りとガウンの着脱を複雑に行き来するプロセスは、安全・安楽にガウンを着せるという目的

としての身体性と順序性の特徴であることが考えられた。これらをもとに、ガウンチェンジにおける基本的なきまり、つまり、ガウンチェンジの原則にあたりと推測した。そのため、本研究では、第2報で得られた順序性・身体性から行為の特徴を原則と捉え、研究の枠組みとした。原則の観点から行為の構造を考察することは、既存の手順書をどう活用すればいいのか、また、複雑に行き来する行為の捉えにくさを克服し、初学者にとっての学習を助けるための原則の示し方と教授方法の一助になると考えた。

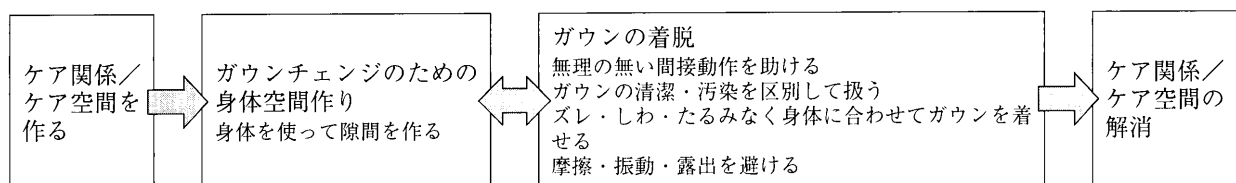


図1 原則のプロセスと要素（第2報より）

<連絡先>

鹿内あずさ
石狩郡当別町金沢 1757
北海道医療大学 看護福祉学部 看護学科
実践基礎看護学講座 内線 3688
E-mail : shika@hoku-iryo-u.ac.jp

目的

本研究は、ガウンチェンジにおける仮説としての原則が、既存の教科書・テキストではどのように示されているのかを明らかにし、原則の観点から行為の構造を考察すること目的とした。

本研究でのガウンチェンジにおける原則は、ケア関係／空間作りからその解消に至るプロセスと、ガウンチェンジのための身体空間作りとガウンの着脱を行き来するプロセスとする。

方法

1. 用語の定義

「原則」は、安全安楽に行為するための基本的なきまりと操作的に定義する。

2. 研究の枠組み (図2)

本研究では以下の2つを原則と捉え、分析枠組みと

した。

原則1. ガウンチェンジにおけるケア関係／空間を作りながら、ガウンを着脱し、ケア関係／空間を解消させるプロセス。

原則を構成する要素は、ケア関係／ケア空間を作る、ガウンチェンジのための身体空間作り、ガウンの着脱、ケア関係／ケア空間の解消、の4つとする。

原則2. ガウンチェンジのための身体空間作りとガウンの着脱の行為を行き来するプロセス。

原則を構成する要素は、要素1：身体を使って隙間を作る、要素2：無理のない関節運動を助ける、要素3：ガウンの清潔・汚染を区別して扱う、要素4：ズレ・しわ・たるみなく身体に合わせる、要素5：摩擦・振動・露出を避けてガウンを扱う、の5つとする。

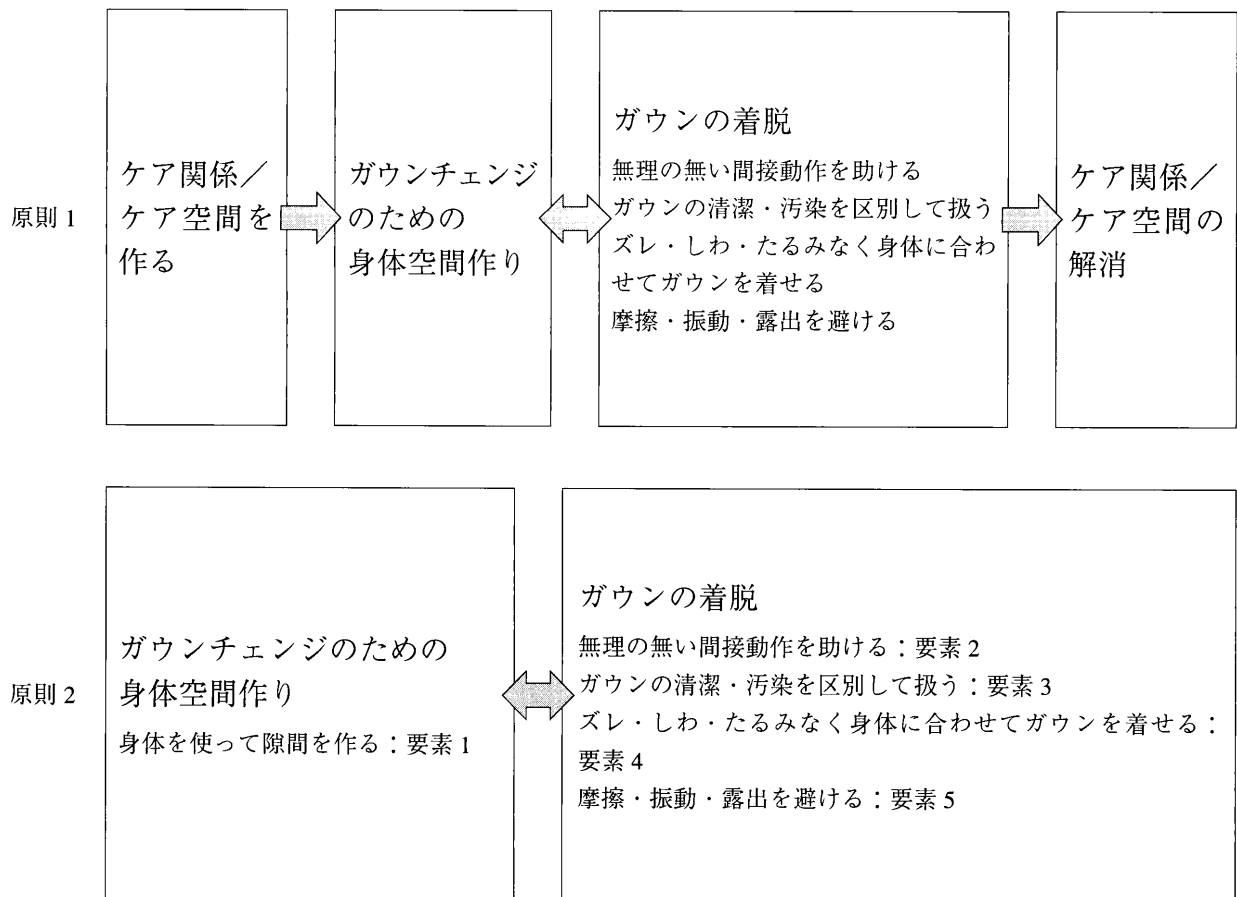


図2 本研究の仮説としての原則

3. データ収集と分析

1) データ収集

手順や方法が記載されている既存の教科書・テキスト11件(表1)を使用した。

表1 使用したテキスト

No	文献名	「タイトル」と項目（データとして取り上げた項目： <input type="text"/> ），ページ番号
1	看護技術必携. 第5版, 医学書院, 東京, 1999	「4. 衣服」生活行動の援助 寝衣交換 [着物による方法] 目標 ケアプラン・実施 理由・効果 143-145.
2	なぜ?がわかる看護技術 LESSON. 学研, 東京, 1999.	「第1章 生活行動援助技術 更衣」第1章生活行動援助技術 更衣 [和式寝衣の交換], 17-23.
3	考える基礎看護技術Ⅱ. 第2版, ヌーベルヒロカワ, 東京, 2005.	「第18章 衣生活」4. 衣生活の援助方法 [臥床患者の寝衣交換] 目標および根拠 [看護師の行動] 注意事項・検討課題, 394-400.
4	基礎看護技術Ⅰ. 第6版, 医学書院, 東京, 2005.	「C衣生活」3. 病衣の交換 実施方法 [和式寝衣—タオルケットを用いないで行う方法] 目的 使用物品 留意事項 [実施方法], 296-300.
5	ビジュアル看護技術1 基礎看護技術. 中央法規, 東京, 1997.	「3. 衣生活」3. 衣服 [寝衣交換 ①着物式の寝衣を交換する場合 (体位変換はできる)] [主な手順—要点・ポイント]—行動の理由・応用, 27-40.
6	基礎看護技術-その手順と根拠-. 第2版, メヂカルフレンド社, 東京, 2002.	「第2章 生活環境の調整と援助技術 2. 「寝衣の着脱」学習目標 (5つ) 身につけておきたい技術項目 要点整理 (5つ 意義・役割・条件・気候・援助) 看護技術分解表 1. 就寝患者の寝衣交換 a 和式寝衣の交換 看護師1人で行う場合 目的 条件 必要物品 [手順] 留意点 根拠, 52-61.
7	基礎看護学—基礎看護技術. メディカ出版, 東京, 2004.	「第2部健康な日常生活行動を促進する援助技術」, 第2部健康な日常生活行動を促進する援助技術 [2. 寝衣の着脱] 身体の清潔の援助技術 [寝衣の交換] ①方法を選択するためのアセスメントケアの結果期待されること ●…情報・アセスメント⑦参照 こんな場合患者さんをどのように援助しましょう? 選択される清潔援助 “就床での寝衣交換” [具体的な援助], 215-219.
8	演習・実習に役立つ基礎看護技術 根拠に基づいた実践をめざして. ヌーベルヒロカワ, 東京, 2002.	「第Ⅱ編基礎看護技術の知識・技術・応用 ④寝衣交換 知識編 寝衣交換 目的 意義 寝衣の種類と条件 技術編 寝衣交換 氏名 目標: 臥床患者の寝衣交換 (和式寝衣) ができる 項目 (日にちのチェック 3回分) [根拠と留意点], 31-33.
9	看護技術学習書. 第2版, 日本看護協会出版会, 東京, 1989.	「12章. 清潔」C. 寝衣交換法 I 着物の場合 [手順(b)側臥位で行う方法], 248 - 254.
10	聖路加国際病院看護手順書委員会. 基本看護手順書. メヂカルフレンド社, 東京, 1984,	「208 寝衣交換」I 目的 II 必要物品 [Ⅲ 方法 a 着物], 90.
11	イラストでわかる基礎看護技術 ひとりで学べる方法とポイント第1版, 日本看護協会出版会, 2003.	「第2章 寝衣交換の方法」側臥位で行う着物式寝衣の交換法 使用物品 [手順], 24-30.

2) 分析

原則1については、横軸に原則1の4つの要素、縦軸に文献番号を配置し、ガウンチェンジの手順、看護者の行為の内容から原則に相当する記載内容を、表に整理した。

原則2の分析については、ガウンチェンジの手順3, 7, 8に焦点をあてた(表2)。なお、これらに焦点を当てる理由は、我々の先行研究において原則の要素の行き来がみられる手順であったためである。表には、身体空間作りとガウンの着脱(原則の要素)にあたる記載内容を抽出した。表の構成は、横軸に原則2の5つの要素、縦軸には文献番号を配置し、記載の有無を整理した(表4, 表5)。原則の要素が行き来する状況については、原則の記載のあった文献別に順序に

着目して、同義である内容を抽出し、行き来の状況を図に示した(図3, 図4)。

表2 ガウンチェンジの行為の手順(第2報より)

1. 事前の準備
2. 対象者を床頭台側に水平移動する
3. 手前側の古いガウンを脱がせて新しいガウンを着せる
4. 側臥位にする
5. 背部の古いガウンを脱がせ、新しいガウンを着せる
6. 仰臥位にする
7. 向こう側の古いガウンを脱がせ、新しいガウンを引き出す
8. 向こう側に新しいガウンを着せる
9. 対象者をベッド中央に戻す
10. 新しいガウンをきれいに整える
11. 行為を終了させる

結果

1. ケア関係/ケア空間作りからその解消にいたるプロセス

原則1の4つの要素は、すべての文献に記載があった。原則1の内容の一部として文献3、7、11を原則2の内容を省いて、表3に示した。以下、一例として文献11のデータを“ ”に示す。

「ケア関係/ケア空間作り」は、“必要物品を準備

する”“物品を準備し、ベッドサイドに運ぶ”“患者に説明して、スクリーンをする”“説明し、綿毛布を掛けながら掛物を足元に扇子折りにする”などで示され、「ケア関係/ケア空間の解消」は、“着心地を確認し、綿毛布を取り除き掛物を掛ける”“掛物をかけ、綿毛布を取り除く。掛物の乱れをなおす”“スクリーンを元に戻し、綿毛布を片付ける”などで示されていた。

表3 文献中の原則1の記載状況（一部抜粋）

	ケア関係/ケア空間を作る	ガウンチェンジのための身体空間作り	ガウンの着脱	ケア関係/ケア空間の解消
文献6	1. 必要物品を準備する 2. 患者に説明する 3. スクリーンをする 4. 室温を調整し、すきま風等を防止する 5. 床頭台、椅子を離す 6. ランドリーバッグをベッドの後柵に結ぶ 7. ベッドのストッパーを確認する 8. 綿毛布をかけ、足元に扇子折りにする 9. 着ている寝衣の紐を綿毛布の下で解く	< 省略 >	< 省略 >	21. 患者に着心地を確かめる 22. 汚れた寝衣をランドリーバッグに入れる 23. 掛け物をかけ、綿毛布を外す 24. 床頭台と椅子を元に戻す 25. スクリーンを除く 26. ランドリーバッグを外し、退室する
文献7	1. 必要物品を準備する 新しい寝衣、綿毛布またはタオルケット 2. 説明し、綿毛布を掛けながら掛物を足元に扇子折りにする	< 省略 >	< 省略 >	7. 着心地を点検し、綿毛布を取り除き掛物を掛ける
文献11	1. 物品を準備し、ベッドサイドに運ぶ。 2. 患者に説明して、スクリーンをする。 3. 綿毛布をかけ、その他の掛け物を足元に扇子折りにする。	< 省略 >	< 省略 >	19. 掛け物をかけ、綿毛布を取り除く。掛け物の乱れをなおす。 20. スクリーンを元に戻し、汚れた寝衣、綿毛布を片付ける。

2. ガウンチェンジのための身体空間作りとガウンの着脱の行為を行き来するプロセス

手順3. 7. 8における身体空間作りとガウンの着脱のプロセスを検討したところ、手順3（表4）では、文献4・6・7・8・9・11において、5つの要素すべてが記載されていた。手順7と8（表5）では、文献4・5・6・8・9・11では、5つの要素すべてが記載されていた。また、これらのいずれの文献においても、5つの原則の要素が行き来していることが明らかになった。手順3について文献4（図3）、手順7. 8について文献11（図4）を用いて、原則2の要素の行き来を説明する。図で示したように、要素1と要素2がいく度も行き来し、その行き来の前後に要素3・4・5が記載されていた。以下、データを“ ”、データの後に要素の番号を（ ）内に示す。

手順3. 【手前側の古いガウンを脱がせて、新しい

ガウン着せる】

文献4を例にあげると、ガウンチェンジのための身体空間作り（要素1）とガウンの着脱（要素2・3・4・5）として、“ナース側になるほうの着替える寝衣の前身ごろに、清潔な寝衣の前身ごろを重ねる（3）”“ナースの手を入れて（1）手前側の前身ごろを、えりもとから裾のほうへ順に脇へおろし、えりもとを肩のほうへ引き上げるようにゆるめて（5）から、肩の部分のえりを持って（1）患者の肘関節をナースが支えるように手で下から支えるように持ち（2）”“清潔な寝衣の袖口から片方の手を入れ（1）”、他方の手はそで口を持って（2）患者の手からそでを抜く”の記載があった。続いて、“肩の部分を「くるり」と折り返すようにして脱がせる（5）”、“患者の肘関節をナースが支えるように手で下から支えるように持ち（2）、他方の手はそで口を持って（1）患者の手からそでを抜く（5）”、“脱

いだ側の前身ごろを落屑が散らないように内側に巻いて(3)ベッドの上に置く”, “清潔な寝衣の袖口から片方の手をいれ(1)” “患者の手関節と前腕を下側から支えるように持って(2)” “患者の上腕のそでを通し, 他方の手でそで山にあたるえりの部分を持って引くようにする(4)”, “えりの位置を確かめながら(4)前身ごろを正す(5)” と示されていた(図3)。

手順7・8【向こう側の古いガウンを脱がせ, 新しいガウンを引き出す/向こう側に新しいガウンを着せる】

文献11では, ガウンチェンジのための身体空間作り(要素1)とガウンの着脱(要素2, 3, 4, 5)とし

て, “片方の手を患者の肩, 臀部の下に入れて支え(1), 片方の手で汚れた寝衣と清潔な寝衣を身体の下から順次引き出す”の記載があった。続いて“汚れた寝衣の袖を脱がせ, 内側に巻き込むようにしながら, 寝衣全体を脱がせる(3)” “清潔な寝衣の袖をたくし持ち(5), 看護者の一方の手を袖口から入れて(1), 患者の手関節部分をしっかり持って(2), 肘を伸ばしながら袖を通す(4)”, “袖つけ部分に十分なゆとりがない場合は, 寝衣の腋窩部分をつかみ, 手前に引くゆとりができる(1)”, “前身頃を, 反対側の前身頃の上に重ねて広げ, 胸部, 腹部, 下肢を覆う(4). 左前身頃を上にして重ねる(5)”と示されていた(図4)。

表4 手順3における原則2の記載状況

要素	1	2	3	4	5
文献1			●		●
2	●	●			●
3	●	●	●		●
4	●	●	●	●	●
5			●	●	●
6	●	●	●	●	●
7	●	●	●	●	●
8	●	●	●	●	●
9	●	●	●	●	●
10	●		●		
11	●	●	●	●	●

(●: 記載あり)

表5 手順7・8における原則2の記載状況

要素	1	2	3	4	5
文献1		●	●	●	●
2	●		●	●	●
3	●	●	●		●
4	●	●	●	●	●
5	●	●	●	●	●
6	●	●	●	●	●
7			●	●	●
8	●	●	●	●	●
9	●	●	●	●	●
10	●		●	●	●
11	●	●	●	●	●

(●: 記載あり)

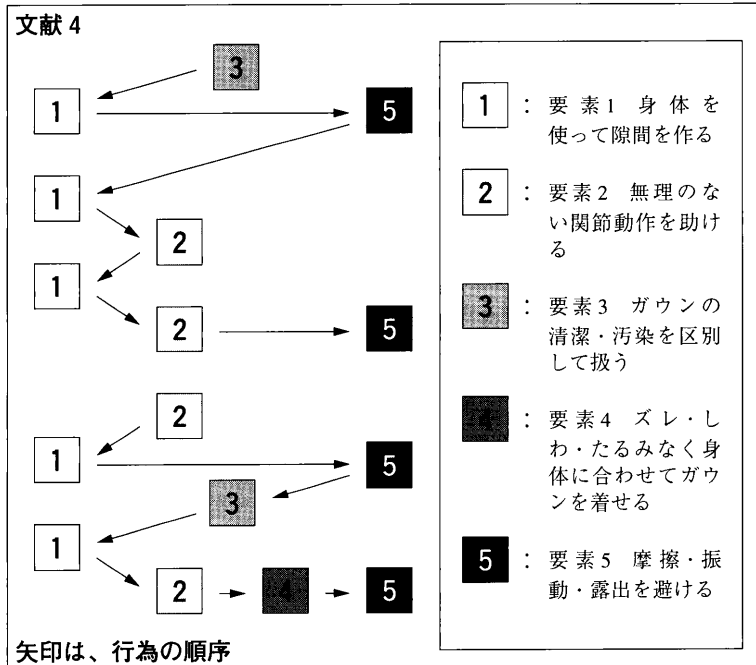


図3 原則の要素の行き来の状況(手順3 手前側の古いガウンを脱がせて新しいガウンを着せる)

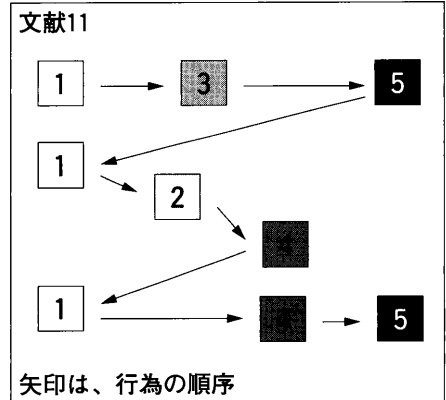


図4 原則の要素の行き来の状況(手順7・8 向こう側の古いガウンを脱がせ, 新しいガウンを引き出す/向こう側に新しいガウンを着せる)

考察

1. 原則から見えてくる行為の構造

原則1のケア関係/ケア空間作りからその解消にい

たるプロセスは, すべての文献に共通して存在していた。

衣生活における更衣は, 自ら更衣が出来る状態にあ

ればプライバシーの守られている環境で、それもわずかな時間で行われる行為である。しかし、臥床している対象者にとってはそれを看護者に委ねなければならない。身体を保温しプライバシーを守っている着衣は、汗などで汚染したものはあるが対象者のぬくもりを帯びたものでもある。ガウンチェンジという行為は、看護者が対象者のぬくもりを持った衣服を剥がし、皮膚を露出させることで対象者の身体から脱がせ、新しい衣服を着せるという行為である。その行為は、それを行う看護者と対象者との相互身体的な関わりによって成立³⁾⁴⁾し、看護者と対象者の互いの身体的な関わりの中で行為の意味づけや目的として存在する⁴⁾。ガウンチェンジが看護技術になるためには、行為が単なる順序ではなく、相互作用の展開のなかで踏まれる一つ一つの手続き⁵⁾⁶⁾となる必要がある。従って、原則1は、対象者との挨拶や目的を伝えることから始まり、対象者の居る空間で関係を作り、対象者とやりとりをしながら自身の身体を使って対象者の身体を動かしながら着ているガウンと新しいガウンを扱う行為をしていくこと、そしてその関係をいったん終了して空間を解消するプロセスとして、相互作用を展開しながら、ひとが人に行う行為である看護のプロセスそのものを意味していると考えられる。原則1からみえてくる行為の構造は、ひとが人に行う行為のために欠かせない順序性と身体性を含むプロセスであり、安全・安楽にガウンを着せるという目的を達成するための意図的な関わり、つまり、看護として成り立つための構造であると考えられる。

原則2は、ひとつの手順、看護師の行為のなかに原則の要素が複数に存在していた。原則の要素は、手順の内容、看護者の行為として記載されていた。これらのことから、本研究の原則という切り口でテキストをみれば、これらの原則をもとに形成された順序性があると捉えることができる。手順3の結果からは、隙間をつくって肩をはずす、隙間を作って手前側の袖を脱がせる、隙間を作って袖を通す、の3つの行為が捉えられた。この行為は、古いガウンの襟を持ってガウンと対象者の身体の間隙間を作ることで肩をはずし、袖をたくし持って隙間を作ることで摩擦なく袖を脱がせる、新しいガウンの袖をたくし持ち、対象者の手関節・前腕・肘を支えて袖を通すという原則の要素を含む行為を意味している。また、手順7、8の結果からは、隙間をつくって上半身部分の古いガウン・新しいガウンを引き出す、隙間をつくって下半身部分の古いガウン・新しいガウンを引き出す、隙間をつくって袖を通す、の3つの行為が捉えられた。この行為は、対象者の肩とベッドの間に自身の手を入れて隙間をつくり、先に汚れたガウンを引き出してから清潔なガウンを引き出し、上半身部分の寝衣を脱がせて着せることを意味しており、次に臀部とベッドの間に自身の手を

入れて支えることで下半身部分の寝衣を脱がせて着せることを原則の要素を含む行為を意味している。

これらのことから、新しいガウンと古いガウン、手前側のガウンと向こう側のガウンなど条件によって、原則の要素が重複し複数存在しているが、空間と着脱のみに注目すると、身体とガウンに隙間をつくる、隙間をつくって脱がせる、隙間をつくって着せる、の3つの行為から成ることが考察される。従って、原則2からみえてくる行為の構造は、この3つの行為によって、看護師の身体を使って隙間を作ることでガウンと対象者の身体を扱うということを支えられ、その行為におけるひとつひとつの動作が看護技術の相互身体性を支える柱として成り立っていると考えられる。

2. 行為の構造を原則から示す教授法

原則の要素の複雑な行き来については、テキストの記載を読むだけでは看護者の身体と対象者の身体の間で2枚のガウンを扱っていくガウンチェンジに特有の複雑さ故に、理解することが困難である。

現行のテキストでは、臥床した対象者に行う設定となっているため、看護者と対象者の2つの身体と2枚のガウンを介した複雑な行為となっている。空間を扱いながら、対象者の身体を対象者の関節を扱い・無理なく着せ・脱がせる、という行為として扱うため、テキストには細かな手順は記載せざるを得ず、要点・ポイントとしての記載、あるいはそれを示す図や写真が記載されている。ガウンチェンジという看護技術が、看護者自身の身体を使って空間を作る、という原則の要素によって成り立つことを示すにはテキストとしての記載の限界があると推測される。

初学者である学生には、ガウンチェンジという看護技術が看護者自身の身体を使って空間を作るという原則の要素によって成り立つことをテキストから理解するということが難しい場合が推測される。手順のみを頭にいれて実技演習に臨んでも実施できない場合が多い。本来、意味のある手順は、どれひとつをとっても、それを抜いては技術の全体的な意味が崩れる⁵⁾⁶⁾ものであり、看護実践能力の基盤となる技術教育となるためには、授業過程のなかで学生が本質的な理解に到達するために具体的に何をどのように提示すべきか⁷⁾が重要である。

初学者がガウンチェンジという技術を身につけていくためには、原則1のケアの始まりから終わりまでのプロセスをベースに人が人に行う行為することで看護の技術になることをまず教え、次に、ガウンと対象者の身体の間隙に看護者自身の身体を使って隙間を作り、そして、新しいガウンと古いガウンを扱う、という原則2について示すことが必要であると考えられる。ガウンチェンジの特有の順序性と身体性として、身体とガウンに隙間をつくる、隙間をつくって脱がせる、隙間をつ

くって着せる、の中核となる3つの行為として伝えることで、ガウンチェンジの技術の構造を立体的に理解すること、またその理解を促すことが可能になると考える。これらの理解によって、学生自身と対象者、そしてその間のガウンの位置をイメージすることが手順や順序性の理解ができることで可能になる。次に、対象者の身体を可動させて着脱させるためには、ガウンの着脱動作時の上肢の関節運動の知識とその立体的な理解、ボディメカニクスの原理を応用した基本的な移動動作の技術が基盤として必要になる。

実際の技術演習の場面においては、空間を作って着せる、という順序があつてはじめて出来る行為であるということを経験していくことが必要であると考えられる。学生自身がその行為をまねて実施し、対象者役を経験することや教員がデモンストレーションでやって見せた後に、衿元を緩めずに肩部を脱がせようとしても皮膚の摩擦を感じたり、ガウンが引っ張られて苦痛に感じたりすることで、あらためて対象者との空間の作り方やガウンの扱い方についての意識化がなされる。この場合も、着ていたガウンの袖を抜くには、衿元を緩め、肩からはずし、自身の身体を使って、袖と上肢との間に空間を作らなければ、少ない摩擦で袖を抜くことは出来ないことを言葉で伝え、それから実際にやって見せることで学生の理解を促すことができると考える。学生は最初こそ上手くは出来ないが、上手なやり方を見て模倣することや対象者役の体験からそのイメージができた時、つまり、前述の知識を活用して理解できた時に自身のボディメカニクスを使って行為することが出来るようになっていく。これらによって、看護者の身体を使って対象者の身体とガウンの間に隙間を作ってからガウンを引き出すことで安全安楽に脱がせる・引き出すという意味のある行為になること、ガウンを引き出してから隙間を作っても何の意味も成さないことの理解が可能になると考える。

結 論

1. ガウンチェンジにおける原則の観点から行為の構造をみると、原則1.2の要素と要素間の行き来は、すべてのテキストに存在することが明らかとなった。
2. テキストの記載から原則を読み解くことの難しさがあつた。
3. 初学者が、ガウンチェンジの技術を身につけていくためには、原則と原則の構成要素との関係を理解することが必要で、原則をガウンチェンジの技術の構造として示すことが重要である。そのことによって、学生の手順の理解を促進し、技術を修得していく必要性が示唆された。

文 献

- 1) 平典子, 明野伸次, 伊藤祐紀子, 鹿内あずさ, 花岡眞佐子. 看護技術における行為の構造化(第1報)ー血压測定における身体性, 順序性の特徴ー, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 2006;2(1), 89-94.
- 2) 伊藤祐紀子, 鹿内あずさ, 平典子, 明野伸次, 花岡眞佐子. 看護技術における行為の構造化(第2報)ーガウンチェンジにおける身体性, 順序性の特徴ー, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 2006;2(1), 95-101.
- 3) 吾妻知美. 基礎看護学実習における看護技術教育の方法論的考察ー患者ー学生相互身体的な関わりを中心にしてー, 日本赤十字看護大学紀要 2001;15, 11-22.
- 4) 花岡眞佐子, 池川清子. 看護技術における知覚体験の諸相ー臨床実習における学生の知覚体験を手がかりとしてー. 医学哲学医学倫理 1997;15, 85-94.
- 5) 阿保順子, 千野良子, 近藤佳苗 他. 国文アイのナーシングアート. 医学書院, 東京, 1997, 47-48.
- 6) 阿保順子, 北村育子, 伊藤祐紀子. 看護学における身体論の位置 2006;2(1), 11-17.
- 7) 稲場佳江, 花岡眞佐子. 看護技術の概念の検討ー看護学教科書からみたその変遷と発達ー. 北海道大学教育学部「教授学の探求」2000;17:65-88.

受付:2006年11月30日

受理:2007年1月30日